

研究発表

チャールズ・テイラーの多元的世俗論とその神学的方向付けについて

坪光 生雄（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

チャールズ・テイラー（1931～）は、今日を代表する社会思想家の一人である。「承認の政治」論や「多文化主義」などによって広く知られる彼の思想は、おおむね「多元主義時代の哲学」という形で特徴づけられるものである。本発表は、テイラーが近年精力的に展開している世俗と宗教をめぐる議論につい

て考察する。大著『世俗の時代』（2007）において集約的に示されたこれらの議論もまた、彼のその他の論点と同様、多元主義的な色彩を強く帯びるが、他方、テイラー自身の信奉するカトリシズムと積極的な関係を持つものでもある。多元性の承認と、普遍的な唯一性の信仰。一見したところ矛盾するようにも思われるこれら二つの目標は、テイラーの思想においてどのように和解させられているだろうか。この問いに対し、本発表は一つの回答を示そうとする。すなわち、世俗と宗教とをめぐってなされるテイラーの長大な記述的/歴史的叙述は、実際、ある規範的/神学的価値によって大きく方向づけられている。彼自身のカトリック信仰および神学的洞察は、多元主義的な社会思想としての彼の世俗-宗教論全体にとって重大な内的意義を持つのである。このようにしてテイラー思想が帯びる宗教的/神学的遂行性に光を当てることは、昨今ますます注目を集める世俗主義再考の諸議論を見通すうえでも意義深い。本発表は結果として、その論争的文脈のうちにテイラーが占める重要な位置をも確認するであろう。